

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 7



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もつと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇一三年七月号 (通巻七八二号)

■遊覧寄港へ『大きな森の小さな家』

浜名結衣 36

■歌壇月旦
短歌ブームの諸相
西堤啓子 37

◇今月の二十首詠……萬葉散策

永田進一 2

■作品[A]

坂上直美・坂出裕子他 4

A

B

C A

斎藤順子他 20

柴田紀子他 50

重松篤子他 60

吉池ケサヨ他 74

大寺智子・小田淑子他 38

久我田鶴子 15

■鑑賞・三好直太の歌 1

◇今月の二人・作品評

猪狩ユミ子・川口禮子 16

久我田鶴子 18

■私と短歌との出会い (25)

久我田鶴子 19

久我田鶴子 18

■高原 桐歌集『春の岬の晴れた日に』 批評

久我田鶴子 20

久我田鶴子 18

生きた愛した詠んだ

久我田鶴子 21

久我田鶴子 18

■〈第一歌集を読む〉 4

久我田鶴子 22

久我田鶴子 18

河野繁子歌集『雁来紅のうた』

久我田鶴子 23

久我田鶴子 18

—精神的生命維持システム—

柴田登志恵

(表紙デザイン) Tatsuo Kuroda

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子

木村文子 48

■五月号作品批評

A……奥田陽子・小原香里 66

泉嘉穂子・ふじとよひこ 66

B……箕浦 勤・潮田千代 66

C……辻田聰美 66

オリーブ集……坂上直美

実務委員会より

〔編集部〕 85

創刊70周年記念地中海全国大会(浜松大会)ご案内

87 86 85 85

クリップ……88

神田通信……表3

44

44

萬葉散策

永田 進一

一九三八年生まれ。
山櫻の会所
第一歌集「花は咲く」
エッセイ「ぶらり因西」

大和路はわがふるさとの道なれば初の吟行ともに歩まん
 秋篠寺の伎芸天こそ恋しけれ細き指先しなやかな姿態

歩みゆく平城宮址はるかなるシルクロードの終着地なり
 どっしりと平城宮の大極殿たかみくらとう玉座の置かる
 遠き日の萬葉旅行このあたり円座をつくりお握り頬張りぬ

佐保川の流れてひさし遠き日の君と歩みし桑の葉求め

佐保姫と立田姫とう女神あり川面にしのぶ君の面影

萬葉の古き都の夕光に鹿も通りぬ信号無視にて

法華寺は光明皇后建てしとう横笛住みし庵もすがし

風呂つくるはハンセン病者のためという光明皇后の遺徳偲びぬ
不退寺の池に映れる面影は誰が面影ぞ木の葉のなかに

業平の造りたるとう仏像の置かれて久し不退寺の宝

荒れ果てし海龍王寺訪ねゆく土壙に見つむ歴史のかなた

濠囲む宇和奈辺小奈辺白鳥の追いつ追われつ戯れ遊ぶ

山の辺の道訪ねゆく鳥 瓜からすうりころり転がりし日の樂しかりき

三輪山は酒の神様杉玉は此処より全国釀造元へ

君描きし耳成畝傍香久山のスケッチブック何処に残る

律令の藤原宮の跡地なり四季の花咲く觀光名所へ

歌書よりも軍書にかなし吉野山たずねて行かむ吉野宮滝

萬葉の心尽くして生き生きと今を生きたし大和まほろば

作品

A

坂上直美

令和五年春

・天

早春のそよ風のなか小鳥らは聞きおるならん馬酔木の鈴音
流れゆく桜はなびらこの春もむなしく過ぎぬ君あらずして
花水木白とピンクの花びらの路上に散れり 朝の雨過ぐ
雨降りて人少なる美術館ローランサンの淡きみすいろ
夢を見てまだ覚めざらん絵の中のローランサンの少女 薄紅
春の朝黄砂に籠む遠き山我が行く末も茫茫として
隣家の若き家族の越し来たり朝のヴェランダパンの匂いす

坂出裕子

春

・洛

桃の花一輪ひらき初めしこと今日のひとひのしあはせとして
あしたより蟬は鳴きをり短かるいのち一杯生きむとはして
川波に星のきらめく暖かき春の光を照り返しつつ
コロナでも桜は咲きて花のもと人は行き交ふ川べりのみち
川べりの石にすわりてぼんやりと枝垂桜を見て帰り来ぬ
お花見も今日で終りか川べりの散歩の道に花びらが舞ふ
デージーの鉢ひとつ買ひ戻り来ぬ散歩の道の今日のしあはせ

佐藤道子

マスク

・甲

一斉にマスク外すは見物かと想ひしものを大方マスク
「山桜今年は早いですねえ」と声をかけくるマスクせぬ人
マスクせぬ同士が会へる朝の道見知らぬ人との会話が弾む
三月に牡丹の花は散り果てぬ異常気候と言はぬ予報士
小公園にお化けの様なラベンダー大株となり花盛りなる
あやめ五月ラベンダーは六月と辞書にあるを三月花咲く
あちこちを旅せしボピーの花の種道端にのびきらめきて咲く

篠原まり子

一病息災

・羊

ベッドにて桜便りのさびしさに数える日日こそ良薬となる
WBCの余韻をまとうキッチンで一人前のバスターにベッパー
朝食の箸を留めるJアラート黄砂にくぐもる不安幾重も
富太郎に名付けられたるヒカゲスミレ何処で見たのか記憶はおぼろ
ランナーを隣の鉢に根付かせてオリヅルランは健在なりき
しんしんと伝わる確かな命はも手のひらの中小鳥の温もり
自らを宥めて過ごすわれなれば胸にひそやか一病息災

柴田登志恵

前ばかり

・天

関根栄子

桜木

・埼

うすべてに花びらびつしり張りつけし軽自動車が信号待ちをり
うすべににうす青まじる並木道新人生は前ばかり見てゐる
着飾りし父母・弟妹の出席が入学式の定型なるらし
樹を揺らし花びら巻きあげすばに風は龍となり蒼穹へ向かふ
飛行機の航跡白くしゆわしゆわとトルコブルーの空に溶けゆく
やうやくにさくらんばの花ひらき初む通院帰りの母愛でけるが
クリミアを視察中とふブーチンの運転せしにトヨタのマーク

須川千恵香

神話

・眉

関根和美

全地

・埼

淡路島は「国生み」の島と古事記 日本書紀に記載ありしと
世界なき高天原の神の命に伊弉諾^{イザナギ} 伊弉冉^{イザナミ} 初に國づくり
沼矛^{カマツチ}もて漂ふ大地をかき回す牢固^{カムラウチ}より自凝島に
自凝^{イザナギ}へ伊弉諾^{イザナミ} 二神は天下り夫婦の契りを結ばれたまふ
大八州^{おほやしゆ}は二神の沼矛で次々と本州最後に日本誕生
国生みの伊弉諾尊は御子神 天照大御神に日本を譲りぬ
淡路島に伊弉諾尊 幽宮にて余生送られ先祖の祖なり

鈴木結志

書芸

・福

高尾恭子

二年目

・大

つたなくもうたに憲され刻食いて三十一文字に命をつなぐ
今日あらばあしたにつなぐ短かうた道真公に習いつむぐ
あこがれのうたは天女のみちびきか満天の星きらめきやまじ
諸星の輻射のひかりまたたきて有事の声をおさえきらめく
運命の出逢いやうに刻かけてひとりの時間によなく満たす
スマホ世に古筆模索の人いると言わるるほどに生きて筆とる
生き力書芸に一途筆とりて今日ある生きをこよなく満たす

まさめにはまだ見ぬ皆既日食を知りたるはじめ「ちびっこギャング」
とつぜんのま屋の間に黑白の反転となる子等のいたずら
間のなか黒き肌を溶かしつつ白き歯白き目生き生きとして
古き世のひとののき想いみる真屋間まつたき闇となること
正午より三時まで全地は暗しとぞ四福音書の三つに記す
豪州に皆既日食ある今宵とおくてゆけずとブリスベンの子は
十二年のちの日本にあるという皆既日食にまみゆるや否

牛乳を飲みつつ見てる時差こえて上書きされるビルの砲撃
棒状の時は無言に流れゆく若き市民の墓碑銘しらず
鳥の声、目覚まし時計、エンジン音どこかで世界の朝がこわれる
二年目を瓦礫の地下に潜みいるどこでもドアのスマホの動画
日本語の上手になつたナターシャの速く見つめる涙が青い
二年目の寒夜を国に帰らんと語る女の唇かたし
憎しみの連鎖はてなく銷びついた記号のような死をかさねゆく

参道のすでに葉桜暗くしてわが失くしたる時間をおもう
実をつけぬ梅の木ありてこの年も伐るや伐らざるまたためらいて
鏡台に色どり少し残すのみもう使わざるマニキュアの瓶
故里の町を歩めど友のいし龕屋、八百屋もとうにあらざり
気づかざるわれに会釈をせし人を思い出し踏切渡る
いつよりか雨の上がりし夕空の急に明るし天啓はなしに
かつて葉を干してたりし櫻の木も花粉のゆえに伐られてしまう

高津砂千子

あじさい

・風

田土才恵

味噌汁

・宙

たっぷりの楓のさみどり目に入れて今日一日の始まりとする
腰ごこめ豌豆とるに時かかる莢と葉っぱの見きわめがたく
大輪の花ふたつにて傾ける鉢のあじさい・ピンク色なり
ひと房の藤を詠いし病床の子規を想いぬふじだなのもと
藤棚ゆ垂るる紫さわさわと風に揺れいるさまこころよき
雨にけぶる宮島ながめパスタ食ぶ黙食さなかの調理実習
雨もよいウォークリングの一時間国旗かかぐる家二軒あり

滝田靖子

荒野

・新

診察室の椅子に初めて日常をおろそかに暮らしたことを探る
聞く耳を持たない人には日本語も通じないのでやうやく気付く
どの群れに身を寄せるべきかもわからねば荒野を独り行く他はなし
身を寄せる群れも差し延べてくれる手もいらない君は独りで生きる
鳥取の受刑者の手に縋はれたる帆布鞄のこの格安は
楽しみに待つてゐたボーチ売り切れて刑務所作業製品大人気
大団円に終はるのをまづ確認し振りおくドラマの最終回見る

田成彦

氣比

・宙

氣比大社花の盛りを訪ね来ていまある命よろこびとする

悠久といふ寂しさや松原に遠潮騒の音を聞きつつ

息長帯比売命の出でまし角鹿の浜のおぼき夕凧

杉原千畝記念館前素通りして急ぎの旅の後悔とする

実感のないまま迎へし八十の重みはあらずわが事ながら

妻がゐてわがゐて六人の孫が居て晩夏光まぶし海の遍照

子がくれしスマートフォンの扱ひにほとほと暮れる小半時ほど

玉井綾子

中学入學

・羊

新入生、来賓、親の参列に歌の聴こえぬ校歌齊唱
中学の入学式に保育園のママ友多し距離置きて立つ
クラス替え子どもの気持ちが一番と言いつつ親の深部のマグマ
二サイズ大きなジャージと制服の袖がこぶしをふわっとつむ
大きな子小さな子がいて中学の入学式のリアル多様性
帰宅して脱ぐ制服を自主的にハンガーにかける入学初日
中学生に校帽のなくドライヤー時間の増える一年男子

中島央子

花吹雪

・森

花吹雪諸行無常のかげを曳きたちまち池の面被ひつくせり

ライラック薄紫の花の房娘が丹精の揺らぎまぶしむ

ガラス器に苺章姫もり上げて弥生尽日むすめの土産

薬にも毒にもならぬ雑草が小流れに沿ひ喜々とし艶めく
わが家の一員となりし保護犬は走るよ走る章駄天ばしり

襟足を拗へゆくわれを映しつつ鏡の奥につづく明日あり

また明日とマーガレットに声をかけ暮れゆく窓のカーテン閉ざす

味噌汁の味とのいて朝餉する三人の心豊かに巡れ
縁ありて孫との生活成る今年懸命に一日一日は過ぎる
青春を謡歌し春の日は暮れて行方知れずに孫の時はゆく
振り返るわが青春と汝が青春六十年の隔たりを持つ

十八の一年共に暮らしきて孫との縁疎かならず
明日は行く北野異人館懐かしき人もおぼろに時はうつりぬ
おさなごのネイティブな英語聞こえ来る異人館近き北野坂の道

永田進一 初仕事

・山

中村博子

花吹雪

・津

池囲む桜は十本それぞれに地中へ根を張り力尽くせり

笛鳴きのうぐいすいつしか鳴りの時候となりて四月終わりぬ

桃太郎フルーツルビー甘太郎バルトの銘柄トマトの苗植え

初仕事町会費集め十八軒石段もあり土日に廻る

突然のFAX届く相談は食品スーパーの土地の買収

自転車の少年被るヘルメット光の中を走り去りぬ

うぐいすの朝より機嫌の良き日かな開発地域の隣接地なれど

直進か右か左か決められず曲りそこねた道はいくつも

永塚節子

檸檬

・銀

西堤啓子

源流

・天

ボストまでの往きに帰りに見上げしは檸檬の一樹と今にして知る。

果の残る檸檬の一樹にはつぼつと色見せ初むる今年のつぼみ

憧れしは檸檬の実る南の国 足元なるをつゆとも知らずに

檸檬のたわわに実るこの町に住みいし年月振り返りみる

かの人の生死も知らず桐の花はかすむ卯月の空へ紛れる

旅の芭に求めきたりし博多人形 父の想いを今にして知る

直進か右か左か決められず曲りそこねた道はいくつも

仲西正子

芽吹く

・沖

白子れい

宮司さま

・洛

風呂場にて詩を吟ずるは無事なこといつもの調子の夫の声きく

風呂場より「川中島」の夫の吟おのずとわれも発声をする

若き日に惚れし詩吟をつらつらと想えばすでに五十年過ぐ

歌一首まとめあぐねて息を吸う春の空地に薬草を摘む

朝ごとに草の緑も濃くなりて春の空地に命の息吹く

石ころの土割り芽吹く春ウコン三寸槍を空へと向けて

こんなにもやさしく咲ける春ウコン薄紅のいろ日に透きとおる

スマホもて若き歌友はグクリリつ「バエル」の意味を教えてくれる
「連」の元気印の春美さんまさかまさかの大動脈乖離

大病の手術は首尾良き春美さん快癒をひたすら祈るばかりぞ

建築科に学べる院の一回生第一志望に内々定す

彦根城を向きて馬駆る井伊直政駅前広場に銅像となる

水入らず親子四人は「海座」にて握り寿司食み花吹雪を浴ぶ

次女のみやげ鉢菓「埋れ木」に抹茶点て桜吹雪と井伊大老傳ふ

ばかりよ二

辞書のなかを散步

・鹿

福田庸子

伐り跡

・今

私の趣味のひとつは辞書のなかを散步すること往々つ戻りつ
訪とめゆきぬあて処なければ好奇心めいっぱいの散步したりぬ
ページ繰る言葉かきわけゆきたれば、あゝと声をあぐる納得の一葉に
辞書のなかことばひしめくよきことも悪しきことをも知識の散步で
ひとり遊び楽しからずやかさこそと言の葉の中に埋没しおり
辞書のなかの自由散策の醍醐味に今宵はちょっと疲れてしまった
三日目に腰かけ前頭葉をやすめようおやすみ又ね流れ星ひとつ

浜谷久子

遠距離

・地

藤田美智子

ヒマラヤ杉

・新

今生のお別れですと新春の電話は施設へ入居の決まると
代代の家系を守りくる人の心のゆくえに変わらぬ幸をと
週いちどの季節便りのわが葉書ひと日の糧より重しと歌に
今生の別れと告げる電話から五ヶ月のちを計報受け取る
二度の会いただあるだけの四十年歌の縁の遠距離友情
午後五時の時折り電話の三十分地元の風景慣わしことなど
柏瀬けを作つてみます書き留めたあなたの手順声を辿つて

檜垣美保子

若葉

・昂

藤森巳行

県議選

・銀

少年のあらたなる日のこの庭に春の落ち葉と春の若葉と
姓変わること嘆かざる少年の「どっちでも俺は俺だから」刺さる
シングルのベッドに兄とおとうとのあるく眠る春
（空）の青さが鳥の羽を青くする絵を描く君に教へられたり
校庭の砂がしいんと静まれり予鈴に児らが引き上げしのち
記憶より消さうとしてはゐないのか亡き君のライン消すを迷へり
風を切る構へに枝を水平に伸ばして立てりヒマラヤ杉は
マスクせる日々に素通りしてきたり香りを放つ花花のまへ

さんかの垣根のすきまを覗きこみ兄とおとうとと声をかさねて
ハナミズキ花散りおり木洩れ日の下を日傘の人のすきゆく
廃業の金物店の軒下に新聞紙置かれ燕むかうる
はじめての道を見知らぬ人と行くガラスの高層ビルが目印

首傾げめぐり占めゆく姫女苑百年前は鑑賞の花
どれほどの種がひそむや伐り跡に野の草草の丈伸ばす日よ
楽しめる暇もたせず一齊に木も草も花の迫りくる今年
なじみある店の名ほつぼつ現れて帰途の電車は県境を越ゆ
一行の記事読めぬまま終はる月萬なす新聞にも追ひたてられて
中国の脅威より眼をそらさずする映像の中に大谷選手
救世主とあがめられしもレバノンに密出国は恥ともせざる

船田清子

卯月から皐月へ

松浦楨子

根津の大石

・羊

はるかなるゴビより起こり道づれにP.M.25まで連れ来し黄砂
白き車 屋根に黒砂糖の撒かれたりと送迎車中での今朝のおしゃべり
公孫樹の並木に緑萌え出でて卯月より五月へきらめくぶき
桜葉の香を楽しむや目覚めたる小鳥ビュブチュ朝のおしゃべり
空に浮くほほほは雲に誘はれて行くに行けざる旅に騎立つ
嬉しくも茶の間に座しつシチリアへ、モンブランなる氷河へもまた
悲しやな眼には映りて一瞬に消えゆく映像止むすべなく

本元由美子 藤波

・岡

春荒れに大陸ゆの埃舞ひ上がる桜も山もうすぐ霞みたり
コロナ禍をみとせ過ごししクラス会八人集ひて笑ひ弾くる
あきちゃんと同じ大学を受験して彼女は一浪 吾は私大に
山の宿に集ひたる友それぞれに病を持ち八十を前にして
よもやまの藤浪さかの徑ゆけば藤ひとふさを駒し呉るるひと
藤波の紫淡く醉ふ少女 さにつらふ頬が万葉に誘ふ
万綠の山路辿ればふぢなみは心臓病む吾に撓に揺るる

牧 雄彦 わが町はいま

・大

松本多摩子

独りよがり

・桜

吹く風はつめたけれども日を浴びて沈丁花の蕾はじける
赤き小さき実のひとつづつ光りて千両は庭の隅に明るし
花落ちてみどり色せる枇杷の実の昨日より今日太りたるなり
宇宙に浮くこの星の上点のごときわが町にいまサクラ咲き満つ
太き幹に小さく細き枝生ひて花三輪の咲きふるへる
桜木の方を掘りしはイノシシか素知らぬさまに花は咲きたり
賽銭箱にコインの落つる音ひびき再び静けし春の夕暮れ

根津嘉一郎とのえたりし庭園の中央に座す石二〇トン
梅園より人手のみにて運ばれし声なき石に苦の生すまま
自らに采配し又曳きしとう根津の大石後の百年
紅葉の逗留せしとう部屋ぬちに坐して遠見に大石のかげ
お宮さん財になびきて蹴られたる物語いまに明治は遠く
「雪夫人絵図」の映画に使われしローマ風浴室タイルは乾く
ある夜に麒麟の部屋に現れて帛紗をたたむ人のおもかげ

松瀬トヨ子 萌黄色

・沖

泣き叫び逃げ惑う子らウクライナ戦 沖縄戦の十歳の夏
山里のつつじ祭りをうち消して高江の空の三機編隊
妹の包みくれたる菜の束が紙の中にて黄の色吹き出す
振り向けば山一面の萌黄いろ樹々の香りを振り散きており
杖つきて草生あやうく歩み来て紫仰ぐ栴檀の花
羽根合わせ草生に止まる複眼が映すルリ色トンボの宇宙
体力の衰えは気のおとろえかベン握る手の指先鋸る

信じて人の心がわからない独りよがりと知りぬ春宵
列島は雲なき空の広がりて春は来たのに心は寒し
若かった瀬戸大橋を歩いた日家族四人の声甦る
疎遠なる妹の夢夜明け前幼きままの姿ありありと
連休に亡夫を知らない家族増え三十三回忌卒塔婆の長し
マスク付けというストレスのなくなりて自己判断の児童館なり
のど自慢一列目の席大当たり友と並んでテレビに映る

三浦好博 わすれな草

・銚

三好聖三 鴉

・伊

深刻なひとばかりでなし病院にお腹の大きなひとも通れり
通学路を一年生が続々行く幸せの国の先に待つこと
F1は棄民のモデルF分の1の搖らぎは快適なるに
トンカチに銀杏割れば友の妻の処理せし去年の風つごとし
子らにとりて故郷の春の海なりてのたりと波より遅れる音
片仮名語に今も馴染めず朝鮮のハングル決めし時は如何にか
声だけは相応しかりし髭づらのパパロッティの「わすれな草」は

三木まり

逢

・昂

御代田澄江 花の威儀

花祭り

・茨

明け方の眼りは浅く繰り返し鬼籍の人に逢いに行く夢
パステルの色の空を覚えてる鬼籍の人の柔らかな声も
手は繋がず即かず離れず歩いていた冬の終りの冴えた風と
明けやらぬ鎮守の森の奥深く雛が鳴く声かすかに鋭く
親を待つ雛の鳴く声ひたすらに鋭く遠く
待てど待てど親の帰らぬ雛があり森の奥はやがて静まる
暮れなすむ鎮守の森のその奥に静かな闇が星が降りくる

宮本靖彦

若葉

・凌

茂木斌

花祭り

・埼

厄除けのひひらぎ若葉角を出しセコムなき家のお守りとなす

咲き終へ椿の丸葉つましくめぐりの若葉生命あふる

春告げし椿は翳りかりん棕櫚櫻の若葉に庭生きかへる

朝な朝な木蓮若葉たくましく体操の我を励ましくる

特養にボランティア再開予定を尋ねれば第九次感染憂ふと言ふ

解るやうで解らぬ夢の毎夜来る朝の体操そを吹きとばす

半藤の「ノモンハンの夏」を読む関東軍・參謀本部の異見に惨敗と

聳やかに立てる樹木のなかほどに鶲がさやき巣を作りたり
燕子花壇の鬼を映し居る水面に近く弁当を食う

振花の咲きたる横を赤色の斑をもてる蛇は過ぎたり

樹の陰に隠れてひそとやり過ごす今は誰とも逢いたくはない
畑での尿のさなかに男きてにわかに尿を止めて向き合う
するするとやくざに墮ちてゆく夢を繰り返し見る今朝も
スイちゃんは海を見ている月光を横切る白き船の行方を

華やぎと威儀も共に湛へをり平和通りの満開の花

桜まつりマラソン応援見物5.5万人桜に続く呼び物あれかし

今年は咲かぬと言はれアカシアにびつしり黄花咲き期を知る自然尊し

郷里由来の著哉の花咲くたをやけに向かへば心深く鎮もる

父母の苦労と喜び見て育ち自己肯定感しみじみ感謝す

世の中に54画の漢字あり中国の一地方びやんびやん麺のびやんの字画けぬ
西福寺の桜染井吉野の原種とテレビに視ぬ香川先生奥津城の桜思ほゆ

新神戸の駅にばつかけうどん食ふ牛すぢ肉乗る好きな味なり
この年もなんぢやもんぢやの花が咲く金神社の祭神は姫
盾型の鏡出土にメールすれば「コフンだけにコーフンしますね」と奈良のひとより
健三郎さん遡きしを悼む『万延元年のフットボール』がこころに残る
「舍鉢」なる店にラーメン食べに行く手もみに捻れ縮れの硬麵
なでしこの種を蒔きしあきのふなりけさ降る雨の幸となれかし

四月八日花祭りある寺にきてマスク外して甘茶をそそぐ

もとむらしげと

朝

・そ

山野幸司

草刈り

・沖

いくたびか目覚めて朝を迎うれば激しき雨は止みて静けし
階下にて妻の立てる音のして悲なく始まる今日の一
日も過ぎし齡残れる齡をおもうこと春に花咲く薔薇が香りぬ
ときおりに単車の音の聞こゆれば午前四時にも動く人親し
カーテンの外に聞こゆる囁きの消しかりけり愈えたる朝は
囁きの速のきてゆく日曜の二度目の眠りは心ゆくまで
身のめぐり心の巡りに積るもの四十年の妻との暮らし

桃原佳子 生き延びる

・沖

冬を越し春が来たりて桜花は心浮き立つ花と思えり
杉桜花粉飛散し春がすみ山は賛く鎮座しており
春風が庭の牡丹を揺らしつつ外に出でよと我を誘いぬ
神の手と信じ臥床せし手術台平静装えど血圧上がる
意識なき間に済みたるかヘルニアの手術の傷の動けば痛む
術後四日目退院となるあの窓か二階の病室カーテン揺るる
短歌一つ生まれて私は生き延びる陽の色したりアマリリスの赤

山下雅子 春

・習

人影の見えずマスクを外したり若葉の匂う春に包まる

雪やなき白蓮さかる空き家の前貴なりし人の化身のことし
大らかに紫煙くゆらす男行く堂々として気分よからむ

曲りくる女一人早口の甲高き声 外国人の声

マスクより笑むまなざしに会釀受くKさんかしら脳のざわめく
せいせいとま白きいちはつ咲き揃う愛しみ育てし姑のあらわる
いつの間に三元号生くコロナを知りWBCの快挙に足らう

あなうれし棚田降り立つ大鳥の何を捕える四月の光
草刈り機共に走れる田の中を隠れ隠れのかやねズミ生く
耳遠き我に地鳴りか草刈り機五反の棚田一気に終わる
草刈り機マムシ切りさき進み行く春の命の限りも知らず
風の鳴り光のゆらぐ田の中に鶴と歩む風景として
農道に散歩の人の賑やかさ春の草花風にほほ笑む
大空に鳥を追いかけ鳴く地球の平和かくあるべしと

山本孟 大和地上絵

・大

どの枝も花花花の桜樹に人おもふなりきのふけふあす
あふき見てけふの盛りの桜樹の復活の日は大和地上絵
桜花わづかな蜜も虫・鳥の生きゆく力根より吸ひあぐ
補聴器はつひにわが耳になじみたり音せぬ部屋の空氣の音を
書棚には逝去の著者の本並ぶ命の言葉血脉に生く
ボタン付け糸からまるや指を刺す妻いかほどに指痛めしか
針ゑんじゆ大樹の房花垂れ下がりひらどつじの華やぎに叛く

養学登志子 花水木

・凌

大泣きのおさなの無理は三輪車のままスーパーに入ることらし
若き母ただにうつむき泣き叫ぶまっかな顔をすべなくみつむ
花水木うららに咲けるもとにしてしゃがみて問うにふとなきやむ
母は子のねるねるの顔拭きなでる安堵の姿に手を振りバイバイ
この曲の未来にのこる渾身をこめたるピアノ坂本龍一
ドレフア・ドレフア龍一の弾くピアノ曲連れ去られる程静かに強し
もう聴けぬ楽の音だからもう見られぬ指だから真夜の「メリークリスマス」

横田敏子 ネモフィラ

・福

市原やよひ WBC

・萬

・羊

目の前にネモフィラの丘広がりて思わずワーアーと歎声上ぐる
赤ちゃんの青い瞳とう花の色澄みて可憐なネモフィラの花
ネモフィラのやさしき花に囲まれて無垢な心地となりて巡りぬ
「みはらしの丘」一面のネモフィラのブルーは空の青に溶け込む
空の青ネモフィラのブルー海の碧「みはらしの丘」は青きパノラマ
人、人、人花の小径の人の波花の数には及ばなけれど
月の夜は息を潜めてネモフィラの色を深めて安らぎおらん

吉永惟昭 殉職

・熊

梅本武義 孫の年齢

・羊

戦いはWBCに任せようテレビ応援席に我也参加す
逆転となるあと一人村上の一打は日本チームを救う
チーム皆手を廻す中滑り込む二人のランナー九回の裏
決勝の最後の打者トラウトを三振にとる大谷翔平
最後なるアウトを取りて仁王立ち大谷翔平マウンドにあり
帽子投げグローブ投げ飛び跳ねて駆けだしており仲間の中に
頂点の喜びの顔大写し侍ジャパン優勝したり

三軍を叱汰する身の赴任先 匂日を経て悲運の殉職
護衛機もつけて不明の師団長閣下はそんなに軽いのですか
消息を防犯カメラに頼るよな制空権は誰が持つてる
師団長・幹部數名消えしまま無為に幾日過ぎてゆきしか
有り得ざる不慮の事故をば悼みつつ遺体いまだ猶のかなしみ
キナクサき南方の海暗示するか搜索広がる宮古島沖
赤きかの花芽ほの見ゆ紫陽花のふふむ薰風 殉職機アガル

磯田ひさ子

みどりこみどり

・森

鶯の鳴くに負けじと小綏鶏が声高く呼ぶ里の真昼を
性格は芋にあるや整然と芽吹く隣家と勝手なわが家
スポーツに活躍するも閑バイトして騒がすも孫の年齢
従兵をされたる孫を送る夢戦死の不安覚めても続く
香港も白紙かかけた人民も沈黙させて行くのはロシア
侵略を止めれば和平なるものを話し合えとは心根の見ゆ
希望的な討論なれど心地よしウクライナの反転攻勢

大浪美雪

鎌倉街道

・森

地より湧く新葉たちまち広^{ひろ}りぬアカンサスの葉深く裂けたり
強韌な葉を從へてアカンサス竜頭のこと^{こと}き茎を伸ばしぬ
「病める時も健やかな時も」病む夫を看取る日々励ましくるる
病む夫の寝入りし真夜を音たてず風呂につかりぬお湯が波打つ
竹炭を入れ沸かす湯の身に染むる淨き音たて力チカチカチカチ
病む夫のスケッチブックのメモ歪みどり こみどり もえぎ うすべに
その時はその時と自らに言ひ聞かす先のことはわからぬゆゑに

字名に〈鎌倉街道〉と残りをる丘陵をゆく春の一日
太古には海岸線といふ丘陵へ海拔ゼロより敷道登る
上総介広常馳せし街道をのびる摘みつづゆるゆる進む
両側はゴルフ場なる中をゆく令和の人ひがな遊べり
道沿ひにぼつんと残る碑の薄れし文字に〈左鎌倉〉
目の限り広^{ひろ}くる畠地に働くは研修中の外つ國の人
枯茅のなびける小山は頼朝が閻兵をせし御所覽塚と

奥田陽子 予感

・羊

上林節江 春の栗駒山

春の栗駒山

・鷗

限りなき空の青さよ冬木立差し交わすなか一羽が飛べり
一羽入ればつきつき水に入りてくる春子なるらしちいさき鴨の
花明りうすき午後なり時おり鶴の鳴きいて椿落ちくる
雨の来る予感に花の散りやまず公園に人の影も去りたり
黄砂來て閉じ込められし午を過ぎ電話のベルの鳴る音はげし
色増せる常緑の枝揺るる時季のごとき光をこぼす
脆き物ごとく堅く固められ降り積もりたる時をうしなう

小野雅子 おかはり

・羊

森奥へわれの心をわしづかみ歓喜のことく水芭蕉の白
湿原は拡がりつづけているという三日かさねて花を観に出る
清らかに始まる魔法を見るここち山の裾から萌黄だちくる
ふるさとの山の出で湯にふりかかるまだあどけなき鶯の声
山頂は雪のおえどそろそろと桜の枝に花芽赤らむ
姉弟が揃いましたと手を合わす栗駒山の雪のいただき
この先の仙秋ラインはまだ閉鎖、花山御番所から帰路となる

菊地栄子 石畠道

・海

卯月となり日射しは部屋に入らずに冬より寒し冬より寂し
春雨の駐車場なり「空」の字が白く浮かんで昏れゆかんとす
「寒いね」と冬のやうなる会話して生協の車三人で待つ
中学の通学バッグを見せに来て何回目かの「おかはり」をする
肩掛けの白いカバンの男生徒 同級生の姿のうかぶ
亡き人にクラスメートの訃報告ぐ二人の声と笑顔の還る
大きめの上衣着て立つ中学の入学式の写真を飾る

神田鈴子 花

・大

たちまちに多羅葉の実は食われたり実なきは寂しまだ寒き春
北風を防げと頼みしかナメの樹葉群深まる八十歳の春
眼が見えぬ足は不自由と語りしが迷いもありぬ確かな声
つれなきに付いてはおらぬ菜紐休憩したき文庫本閉ず
アルミホイルは手軽で便利ストーブに焼かんと包む紅甘藷
集中出来ねば立ちゆく台所待ち受けている白菜胡瓜
海原へ乗り出すごとく胸はずむ春の光の石畠道

北山雪男 桜をめぐる断片

・伊

花を見ず花を恋ひつつ逝きし母回忌の空にさくら咲き満つ
弟や子らの語れる思ひ出にありし日の母甦りくる
花の下に集へるわれらを見守るやははそはの母三十七回忌
大空に波打つさくら歩みゆくわが身にひらりひらり舞ひ散る
弾みたる心に見上ぐる満開の花のはひの空はみづいろ
入りつ日を浴びてさくらは光りつつ終の花ひらいま散らしゆく
通り抜けの桜テレビに見るのみに夫と歩みし遠き日かへる

わが街の桜ちらほら点りしと耳にほのぼのご近所便り
「桜より連翹が好き」と金氏いふナショナリズムのかをりちらりと
町内を一回りして見る桜〈旗〉にも〈死〉にも異次元の目に
観念論掲げて桜見る人の肩は凝らぬか 他人事ながら
もの思へばとほき徃なり花陰に外国人とすれ違ひつ
ふるさとの訛忘れて覚えたるカタコト韓国語、デラシネ訛
花の街を斜めによぎる無幹にも今宵ほのかにかかる月光

草刈十郎

啓蟄

・世

近藤栄昭 気配

・虹

久しぶり再会の友はみな同じマスクをつけて老いてゆくなり
人生はひとひ一日が旅といふ今日は如何なる旅路となるや
桃は咲きけふは啓蟄すすめらはこぞり終日地球ついばむ
これからはかんしやく起こさくの一字捨てて楽しき余生としたし
腕時計めがねときどき隠れん坊鬼さんいつも探すいらいら
友よりの呑まうの誘ひにせの咳すまし顔してもどる炬燧に
はなやかな桜とちがひつつましく梅は盛りを競はず咲けり

河野繁子

武蔵鎧

・雁

苔より折りたたまれし葉のほどけ春だと拡ぐテンナンショウは
土のなかの製造工場見せるなく広葉の下の鎧完成
じやじや馬の鎧ひきしめ鎮めしはどこの貴公子逢うても見たし
階段を四段上る魔のボスト夫の目覚めぬあいだに急ぐ
筈をやわらかく茹で持ちくれし夫と同級男ぐらしは
癌三つ取りのぞきたる退院後会えは懸命草刈りのひと
先のなき一日一日を大切に補聴器かえて何でも聴かな

小林能子

メッセージ

・羊

坂本龍一さんが亡くなりましたとは　T.Y.O東京公演その三日後
被災地の子どもだからと思はせぬ演奏目指しませうと「ユース」に
T.Y.Oに寄りそふ教授のメッセージ　どうか音楽をお楽しみ下さい
鳴りやまぬ会場の拍手　床に伏す坂本龍一にとどけと昨日のこと
坂本龍一さん追悼あまたの想ひ載せ「福島新報」夕べ届きぬ
神宮外苑樹木伐採反対に心情的支援　いまできること
つるばみの若葉の色に染まるまで樹下に幽かの鐘の音を聴く

気持ちよく梅雨の残りを掠め取り夏を見せいる青届きそう
目を合わせ疎かならず触れている意識通じる気配生まれて
素数という意識を破り突然に公倍数が仲間と言いくる
満たそうと隙間を埋める本能か血脉ありぬ足の末梢
避難民期待の視線が飛びかいぬこれから向かう弾道の果て
亡き人の口元動く指示言葉手に余しる響く言靈
あの人と最後の出会いはあの時と思う階段黄砂に霞む

近藤芳仙

いざ大原へ

・信

妙音のこだましてゐる大原の里歩みたし　音を聴きたし
苦むせる三千院の弥陀の御前　耳を澄ますも静まります
四圍の木木ぶるはせて撞く梵鐘と思ふも来迎院の声明に消ゆ
薬師・釈迦・弥陀三尊の御堂とふ數多の僧侶の足音の跡
建礼門院徳子身をよす里の道　水音のして緑にあふる
なにもかも無常のひびき井戸跡に鳥の来鳴きてけふの声する
小路がくれしたくなるよな先斗町　憂き身はもはや変はらぬものを

久我田鶴子

こゑもなく

・羊

死にてのちなかなか腐らぬ日本人　もんたいはどこにあるか考へる
空遠く風の鳴る聲こゑもなくかへり来しもの翼をたたむ
夕方より雨、の予報に風はやや湿りを帯びて草の葉ゆする
きもちいい風吹く朝友の死をなぞる頭が物干してゐる
知りゆしはごくごくわづかにすぎると友を思へる今さらながら
シンちゃんはと訊かれてゐるがシンちやんで母の息子で六十年ば
昼の陽射しにカーテンをひき泊まつてく。生きる時間がごちやごちやになる

銹

久我田鶴子

みずからに銹吹くことく黙し佇つゆうべ凍みて澄む島嶼のうえの空

『離離航海』(赤堤社 昭和41年刊)

年譜によれば、三好直太は昭和三十二年から三十八年までの六年間、ギリシャ船の船員として働いていた。年齢にして、三十四歳から四十歳の頃である。

この歌、おそらくは船上にあって、凍てつくような冬の夕空を見上げている。黙って佇んでいる姿が「みずからに銹吹くことく」と表現されているのに目が留まる。しかも、一般的に使われている「銷」ではなく、「銹」の字が使われている。

『新字源』に当たってみると、「銷」は「くわしい」の意味で、「さび」の読みは日本語としてのみ用いられているようだ。一方、「銹」は金と音符秀(にじみ出る意)からなり、金属の表面ににじみ出る「さび」の意を表わすとある。漢字本来の持つてある意味からすると、「さび」は「銷」ではなく、「銹」と書くべきなのだろう。

下の句は、「ゆうべ凍みて澄む／島嶼のうえの空」。字余りになっている上に、「島嶼」は、どう読むのか。再び、『新字源』で「嶼」に当たってみると、「しま・小島」とある。見辨かず海上には幾つかの島があり、大きいのもあれば小さいのもある。と見ていくようだ。ルビが振られていないので、そのまま読もうとすれば、「とうしょ」となるが、そうではあるまい。音数からすると、「島嶼」で「しま」と読ませるのだろう。この辺り

にも、作者の表現に対するこだわりが感じられる。

「ゆうべ凍みて澄む／島嶼のうえの空」で、8・8の字余り。凍りつくような冷え込みの中、島々の上に澄んで広がる夕空。その景に次第に銹を吹くような身は包み込まれてゆくのである。景との一体感がそこにはある。それは厳しい冬の景だ。

ところで、「みずからに銹吹くことく」と表現された立ち姿。すぐに浮かんでくるのが、「身から出た銷」という慣用句である。『広辞苑』には、「自分のした悪行のために自ら受け辱めや災禍。自業自得。」とある。「みずからに銹吹くことく」は比喩表現になつていて、慣用句とは直接つながってはない。だが、この慣用句を知らないということはないだろうから、どこか意識の隅にはあつただろうし、「自業自得」と響き合つような自分の中に收まりきれないものを抱えていたのかもしれない。それが何であるのかは分からぬが、「自分で自分自身をさいなんでゆく。幾多の理由があることだろうが、おそらく、自分自身の個性を強烈に把持しつづけようとするからではなかろうか」と、この歌集の終わりに香川進(この歌集を編集した)は書いている。

他には、次のような「銹」のうたがあつた。船員の仕事として、船体維持のための銹打ちという作業があるのでそうだ。わが息噸に灰のなかよりうかびくる煥あり煥も冬の銹立ぱりつめし顔にひとすじ終の日が沁む刻々に銹打たんとす寒き日を追いうつ労働の額に沁む銹の粉ごと汗をぬぐえり一首目、三首目に見る銹打ちの作業。それからすると、「みずからに銹吹くことく」は、銹吹く船体のように自らを捉えていると言つたほうがいいのかもしれない。景との一体感の前に、自らが乗っている船体との一体感があつたと言うべきか。

ふる里

猪狩 ユミ子

夢のつづき

いち早く光差し入る厨辺の一日前始まる前の静けさ

草を引くわれの背中に纏いつく空氣湿りて雨含む空

冬の月を詠みし茂吉の歌碑近く除染作業の人ら飯食ふ
新しき道の通りで父ははの在せぬ里の近くなりたり

ふる里の友の動画に復興の港の朝の光うごめく

津波禍の写真洗ひし友の言ふ「写つてゐるのは笑顔ばかりよ」

被災地に向けて飛べるかヘリコプター霧らふ朝に音のみ聞こゆ

産土の海近き町思ひ出づ福島盆地に雪の降る夜

銀色のこぶしの花芽北を向く飛び立つ白鳥見送るやうに

冬日淡く差しくる縁にお手玉の小豆の音を幻に聞く

一センチほどの子蛙身の丈の十数倍を越えて飛びたり

天麩羅を揚げるし母のこめかみの汗思ひ出づ盆の厨に

夕さりの道に残れる熱踏みて腰の術後の歩数を伸ばす

突然でしたが、去年の秋に地中海に入つて
いる友人から、本会へのお誘いをいたしました。
カルチャーセンターの短歌教室に
通つて十年になつていました。

友が「とにかく楽しいから」と語る歌会
の熱気、笑い、を聞くうちに遠い昔、短歌
に夢中だった頃の自分を思い出しました。
歌会へのあこがれはあっても結社とは無縁
な五十余年でした。新しいことを始めるに
はためらいも感じる年齢でした。それでも
あの頃のつづきがそこにあるような気がし
て、お世話になることになりました。

「先生ではなく名前でね」とおっしゃる
藤田美智子さんのご指導のもと、活気ある
歌会に参加できるようになって五ヶ月が過
ぎます。みなさんご自分の言葉で話され、
歌の解釈も何通りもあって驚くこともあります。
切磋琢磨する緊張感、もちろん笑い
も存分に。私自身は他の方の歌を読む力の
無さ、難しさ、いまさらですが短歌の奥の
深さを痛感しています。今はついていく
よう頑張ろうと思つています。
あなたがいてくれてよかったですと短歌で伝
える日のために。

赤白黄色

川口 禮子

自分発見の旅へ

ここがいいここで寝るよと小鳥たち夕暮れ時は木々も賑やか
 私はね今日も不機嫌ほつといて明日は笑顔無理にでもする
 始めたよ新しいことドキドキワクワクしたわ短歌の世界
 受験落ちし孫への手紙書きなすむ三日経ってもまだ定まらず
 菜の花を求めて歩く淀川の堤防道にみどり深まる
 波の音きいてみたいと義弟言う音のない世の心ざわめく
 音無きは幸せなしと人言えど心の窓は常に晴天
 君想う僕の心は飛行船宇宙の果てまで逃避行する
 飛び魚は今日もお休み海の底明日は絶対早起きしてね
 踏まれても強く伸びゆく雑草はわたしの心の応援団か
 車窓から一番前で見たかった今はどこかな亡き友の家
 語らいの場へといざなう春日和コーヒ一杯に笑顔もいっぱい
 もっと前に咲くはずだったチューリップ遅れてもなお赤白黄色

はじめまして秋の月夜に新会員かぐや姫
 かと思つてほしい（地中海一月号）
 でデビューしました。私が短歌に関心を持ったのは、皇居で毎年行われる歌会始です。天皇陛下と妃殿下に直接お会いでできるんだと知りびっくりしました。以前からお会いしたいと思っていたからです。その後、皇居勤労奉仕でお目にかれその夢は叶いました。伊勢神宮に参拝されている方々とも知り合い懇意にさせて頂いています。そんなん縁の中、短歌に触れる機会が多くなり、たまたまコーラスのお仲間として親しくしている田土才恵様が短歌をされている事を知りました。一首と一句の区別もできないほどの私をいつも励まし、とんでもない言葉を五七五七に載せても許容してもいい、私はいま短歌を詠むのが楽しくて仕方がありません。最近はこれをきっかけに地中海誌の一つ一つの歌や内容を丁寧に読むようになりました。三月号の中島義雄先生の歌に涙、追悼文を見てまた涙。こんな純粋な感動する心がまだ自分に残っていたのかと不思議でした。これからは自分の内なる思いに目を向け新しい自分を見出し短歌に詠めたらいいなと思っています。

◆今月の二人・猪狩ユミ子作品評◆
霧らふ朝に音のみ聞こゆ

猪狩さんは、福島市在住。「ふる里」は、それより北の、津波に襲われた海辺の町であるらしい。

・冬の月を詠みし茂吉の歌碑近く除染作業の人ら飯食ふ
この場所は、福島市内だろうか。茂吉の歌碑の近くで除染作業をした人たちが飯を食っている事實を飾らずに詠み、線の太い歌になっている。この茂吉の歌を具体的に知っていたら、もっと私の理解が深まるだろうに。自らの不明が残念に思われた。

・新しき道の通りて父ははの在せぬ里の近くなりたり
新しき道が通つたのは、震災後の復興事業の一環だったか。

新しい道によって、ふる里が近くなつたようだが、そこに父母はもういないのであつた。

・ふる里の友の動画に復興の港の朝の光うごめく

友が見せてくれた動画に、復興されたふる里の港の朝の景が映つている。結句の「光うごめく」が、もうそこにいらない者の存在を思わせるようで、ドキリとする。

・津波禍の写真洗ひし友の言ふ「写つてゐるのは笑顔ばかりよ」

津波に遭つて、泥まみれになつた写真を洗う作業をした友。友が言つた言葉をそのまま入れたことで、その言葉を聞いたときの作者の気持ちを読者もまた共有できるようだ。

・被災地に向きて飛べるかヘリコプター霧らふ朝に音のみ聞こゆ

霧に包まれた朝、ヘリコプターの音のみ聞こえる。姿が見えないだけ余計に不穏な感じが漂う。「霧らふ朝に」は、「きらうあしたに」と読む。こうした言葉の斡旋、素晴らしい。

◆今月の二人・川口禮子作品評◆
明日は笑顔無理にでもする

評者・久我田鶴子

川口さんは、大阪市在住。作歌デビューしたばかりで、短歌を詠むのが楽しくて仕方ないと言う。

・ここがいいここで寝るよと小鳥たち夕暮れ時は木々も賑やか
「ここ」の繰り返しにリズムが生まれた。小鳥たちと夕暮れの木々は、どこか金子みすゞの詩の世界を思わせる。都市では迷惑がられている光景かと思うが、作者の捉え方は優しい。

・私はね今日も不機嫌ほつといて明日は笑顔無理にでもする
口語が生き生きと弾んでいる。「今日も不機嫌ほつといて」と言いながら、「明日は笑顔無理にでもする」とは、なかなかの意地つ張り。作者より前に、読者の方が笑ってしまう。

・受験落ちし孫への手紙書きなずむ三日経つてもまだ定まりず
あらら、川口さん、孫がいる人でしたか。受験が上手くいかなかつた孫にどう手紙を書いたらいいのかと、迷いに迷つている。「受験落ちし」は、さらに字余りにはなるが、「受験に」とここは助詞を入れたい。

・波の音きいてみたいと義弟言う音のない世の心ざわめく
音のない世界に生きている義弟は、波の音を聞いてみたいと言つ。音のない世界に「ざわめく」は面白いと思つたが、この「心ざわめく」はどちらの心なのだろう。

・君想う僕の心は飛行船宇宙の果てまで逃避行する
あらら、「僕」って? 男性になつた気分の相聞歌か。変幻自在の作者である。「もつと前に咲くはずだったチューリップ遅れてもなお赤白黄色」という歌も。咲く(詠う)のに、遅いも早いもない。何でもやつてみたら良い。

私と短歌との出会いは、姑の家の金井もりさんの誘いによるものでした。短歌を作れるような気持ちもないまま、その後「サキクサ」会員となり、二十余年を過ごしました。金井さんは、群馬の自宅近隣の人、十二人を引き連れ、東京の「サキクサ」歌会に出席。その席で主宰の大塚布見子先生の近詠三十首をそらで披露されるような女性でした。

入会してからは、欠詠しないようにと歌材探しに懸命でした。地元の高校の先生で、定年退職してからは『万葉集』の講座を持つていた日向野先生の追っかけをしては、あちこちに出向き、万葉歌碑巡りにも群馬西部でしたが何ヶ所も出向きました。短歌が上手になりたい一心でした。

歌材を探して家の周りをめぐってゆくと、それまで知らなかつたことがたくさんありました。わが家の前の街道は旧中仙道。江戸時代、文久元年十一月十日、皇女和宮が将軍家茂に嫁ぐ「東路の旅」の行列がゆる過ぎた街道でした。

思ひきや雲井の袂ぬきかへて憂き旅衣袖絞るとは
・住み馴れし都路出でて今日幾日急ぐも辛き東路の旅
一行は、十一月十四日は上州板鼻泊り、

翌十五日和宮は江戸に無事に着いたということです。家の裏の川も、家の前の街道も、和宮の一行が通った道と知りました。裏の河原へも行くようになりました。こんなにも川には鳥が棲んでいると知り、ゆったり眺めるようになりました。今は言葉に詰まるところに出て、樹や草や花、鳥などを探し求めています。

森の会の歌会は月一度、作品を一首ずつ持ち寄り、皆さんと相互批評をし、グループ長の中島央子様と磯田先生の添削を受けています。そこでは、一字一句を大切にし、特に助詞の使い方に注意するようにと言われます。私の歌はいつも独りよがりで、他人には理解できない作品だと思い知られてもいます。でも、皆さん良い方ばかりで、歌会は厳しいけれど楽しいです。また、著名歌人の歌集から毎月二首を選んで百六十字ほどの感想を書いています。これも私は新鮮で、刺激を受けています。

歌会の会場までは自宅から四時間。それだけの時間をかけても行く甲斐のある歌会です。会場で皆さんと合流し、おいしい食事をしながらお話を楽しく、私にとってはまさに天国です。

磯田先生には「あなたにしか出来ない、あなたの地方で見たこと、経験したことをお詠いなさい」と言っていただき、私は励まされています。八十歳となり、これからも楽しんで続けていきたいと思っています。

私と短歌との 出会い

251

大久保麗子